

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-04

ごあいさつ

明田川, 融

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

50

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

2023-03-31

ごあいさつ

明田川 融

法政大学沖縄文化研究所（以下、研究所などと略記）は、沖縄の施政権が米国から日本に返還された一九七二年の一〇月、中野好夫氏・新崎盛暉氏らが運営してきた沖縄資料センターから資料の移管をうけ、同センターの活動を継承するだけでなく、「学術研究機関としての側面を一そう強化すること」をうたって開所されました。二〇二二年は、研究所創立五〇年という節目の年でした。（開所にいたる経緯は、大里知子「沖縄資料センターから法政大学沖縄文化研究所へ——中野好夫・新崎盛暉の格闘とその継承」『沖縄文化研究』47所収に詳しいので、関心のある方は同稿を御一読ください。）

研究所では、創立五〇年記念事業として、企画展「沖縄を知り、考え、つながる」（二〇二二年五月一三日～同八月二六日）、シンポジウム「いま沖縄を語る言葉はどこにあるか——復帰50年目のジャーナリストたちの挑戦」（二〇二二年十一月二六日）を開催し、いずれも好評を博しました。

二〇二三年三月には『法政大学沖縄文化研究所蔵琉球関係史料目録』も刊行される予定です。

このような事業を行なうことができるのも、半世紀にわたる研究所スタッフの活動の積み重ねがあったからこそです。そのスタッフすべての御名前を挙げることはできませんので、ここでは歴代所長の御名前を挙げさせていただきますと思います。次の方々がその職を務められました。

氏名

在任期間

中村 哲	(一九七二年一〇月一日～一九七八年三月三一日)
外間 守善	(一九七八年四月一日～一九八四年三月三一日)
安岡 昭男	(一九八四年四月一日～一九八六年三月三一日)
山本 弘文	(一九八六年四月一日～一九八七年四月三〇日)
武者 英二	(一九八七年五月一日～一九八九年三月三一日)
安岡 昭男	(一九八九年四月一日～一九九二年三月三一日)
武者 英二	(一九九二年四月一日～一九九四年三月三一日)
比嘉 実	(一九九四年四月一日～一九九六年一〇月三一日)

私が沖縄文化研究所へ初めて足を踏み入れたのは、比嘉実先生が所長のときでした。大学院で指導をうけていた袖井林二郎先生から、「沖文研で沖縄占領に関する研究会があるので顔を出してみませんか」とお誘いいただいたことがきっかけでした。当時、研究所は第一校舎という建物のなかにあ

り、比嘉先生が袖井先生に、「ワトキンス文書を購入しましたので、是非ご覧になって下さい」とおっしゃっていたことをよく覚えています。

比嘉先生が御事情あつて退職された後は、次の先生方が所長を務められました。

武者 英二 (一九九六年一月一日～一九九八年三月三十一日)

中 俣 均 (一九九八年四月一日～二〇〇〇年三月三十一日)

安 江 孝 司 (二〇〇〇年四月一日～二〇〇六年三月三十一日)

飯 田 泰 三 (二〇〇六年四月一日～二〇〇八年三月三十一日)

屋 嘉 宗 彦 (二〇〇八年四月一日～二〇一五年三月三十一日)

中 俣 均 (二〇一五年四月一日～二〇二一年三月三十一日)

研究所創立五〇年にあたり、本誌においても何かふさわしいことはできないかと考え、歴代所長の皆さまに一文をお寄せいただくこととしました。すでに鬼籍に入られた方、また、連絡のつかなくなっている方も少なくないなか、玉稿をお寄せくださった中俣均、飯田泰三、屋嘉宗彦の三先生(以上、所長就任順)には厚く御礼を申し上げます。

冒頭で触れました研究所創立五〇周年記念事業はやり終えることができましたが、今後数年にわたって、現在は資料の一部が目録化されているものの、OPAC登録情報とズレがあり照会しにくくなっている中野好夫資料の目録化、これまで研究所が開催してきたシンポジウムや公開講演を収めた

貴重映像資料の整理・保存など創立五〇年関連事業の達成という課題が残されています。また、研究所の財政状況が年々きびしくなるなか、研究のための外部資金確保、収集・受け入れの進んだ貴重文献や各種コレクションの整理、それらコレクションのデジタルアーカイブ化、定期刊行物の確実な発刊、「総合講座 沖繩を考える」や公開講座の実施、退任されるなどした運営委員の補充、事務体制の拡充等々、研究所が取り組んでいかなければならない課題は山積しています。

それでも、創立五〇年を機に、「沖繩を中心とする南島の文化と言語の総合的研究のために、中央と現地を結び、また関連の人文、社会諸科学の研究センター」たらんという初志にたちかえり、いわゆる本土で施設を有する唯一の研究所として活動を続けていく所存です。運営委員、所員、研究員、沖繩研究者の皆さま、引き続き御教示、御鞭撻、御協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

二〇二三年一月二日

(沖繩文化研究所所長)